

逋信記念日にあたって

1968年4月20日

上田弘之

恒例によりまして、本日は逋信記念日を迎えました。逋信記念日は、郵政部内に対しては、「郵便の父」前島密（ひそか）氏ら先人の功を偲んで事業に対する熱意を強める機会とし、また一般国民にに対しては、事業に対する認識と理解とをいっそう深めてもらって、事業の健全な発展に役立てようというのが目的で、昭和8年に設けられたものであります。このため、毎年4月20日に式典、ならびに各種の行事を行うことになっております。

4月20日というのは、明治4年4月20日に、東京一大阪間に初めて新式郵便制度が創始された吉日を選んだのであります。ここでいう新式郵便制度というのは、それまで行われてきた民間の緩慢な飛脚便を廃して採用された官業の郵便制度という意味であります。逋信記念日の制度は、昭和9年4月から実施されて来ましたが、昭和24年6月1日に逋信省は、郵政、電気通信の2省に分離されましたので、昭和25年から「郵政記念日」と改められました。しかし、その後郵政省は、また電気通信ならびに電波に関する行政をも所掌することになったので、昭和33年再び「逋信記念日」と改称され、今日に至っております。本日は大臣表彰が行われ、当電波研究所からは事業優績により、個人では平井正一君、団体では周波数標準部が本省の式典で、永年勤続により島崎久六君が東京郵政局の式典で受賞されました。また、当所におきましては、所長表彰を行い、個人では斎藤一君、団体では犬吠電波観測所が唯今表彰されたところであり、受賞者の多年にわたる御苦勞と立派な御功績に対し、心からお祝い申上げる次第であります。

扱て、私はこの機会に、「郵便の父」と仰がれている前島密氏について、御紹介をしておきたいと思ひます。というのは、われわれ電波関係の者にとりましては、「逋信記念日」といっても、どうもぴんとこない。それというのも、郵便の始まりや前島密の苦勞について知るところが少いからだと思ひます。先般、私も必要に迫られて、初めて前島密伝を読み、大変感激いたしましたのであります。逋信といえ、郵便も電気通信も同族の一員です。電気通信ももとよりその中の一員に外なりません。狭い世界に閉じこもっていないで、広く世界を見て行くこと、このことが逋信の本領だと存じます。今後、逋信の世界は益々拡張され、社会、経済、産業、交通、文化、各般にわたる総合開発の立役者になるでございましょうし、機械に使われていた時代から人間を解放

し、さらには人間の頭脳の代りまでしてくれるような時代が来るのもそう遠くはないでしょう。

100年前の日本の夜明けに働いてくれた先輩の苦労は大変だったろうと思いますが、それと同時に、今日われわれが直面している苦労もまた同様に大変であることを感じます。このような意味では、郵便を創めた前島密に学ぶべきことの多いことを感じます。これが、本日皆様に前島密について御紹介を申し上げようと思った所以であります。

#### 前島密

扱て、

「郵便の父」と仰がれる前島密の伝記を読んで、特に強く感ずることがあります。それは、

- 第一は、その生い立ち
  - 第二は、極めて意欲的で、しかも地道な焼みなき努力、
  - 第三は、高い識見
  - 第四は、綿密な計画と実行力
  - 第五は、無欲で公正なこと
  - 第六は、身体の頑健で趣味の広いこと
- であります。

前島密は1835(天保6)年に越後国中頸城郡津有村大字下池部で生まれたのであります。今から133年前のことです。上野助右衛門二男となっております。この父は村農であります。密が生まれて8ヶ月目に病没しております。ですから母の手一つで育てられたといえます。この母は貞子といって、高田藩士伊藤源之丞(食禄300石)の妹であります。藩主榊原侯の奥に仕えていたため、婚期がおくれて上野家に嫁し、密一人を生んだとありますから、後妻に入ったのでしょう。このお母さんが傑い人で、この母は一人児を抱えて、高田に別居し、お針仕事などをして暮らしを立てたようです。ところが母の弟に当るのでしょうか、相沢文仲というのが、ある日母のところに来て、あまり惨めな暮らしをしておるのを見て、糸魚川に来るようにとすすめ、糸魚川に移りすんだのです。

相沢はお医者さんですが、オランダ式外科を学んだ有名な医者で、密を他日自分のあとつぎにすることを約束したのです。この糸魚川時代から密は教育を受け、詩文を学び、また医学や薬剤

の調合なども教ったようです。

ところが、11歳の時、大学者といわれる安積良齋（あさかこんさい）が江戸から高田に帰ってきて、私塾を開いたという噂を聞きました。これを聞いてじっとしておられず、母に頼んだところ、母はこれを快く許したばかりでなく、教訓を与えて、高田に遊学することになりました。高田では生家から遠い道を毎日通学して学業に励んだのですが、やはり田舎は田舎です。子供心にも、将来大成せんとすれば、こんな片田舎ではいけない、ぜひ江戸に出なければと感じ取りまして、母に相談いたしました。しかし、学資をどうすることもできません。すると、母は密に与えられるだけの金を工面した後「苦学してやれるだけやって見なさい」と励まして、密の江戸遊学を許しました。これが1847(弘化4)年、数え年の13の時であります。

江戸へ出てからは、大変な苦勞をしたようではありますが、これから彼の世界は開けたといっただいでしょう。金がなくて、布団も着ず、机によりかかって寝たこと3年といっていますが、それでも勉強はばりばりと頑張ったようで医学、漢学、蘭学、数学、手あたり次第、何でもやったらしいです。

江戸に来てから6年後の1853(嘉永6)年には、ペルリが浦賀にやってきました。これを契機として、世は大きく変わって行ったのです。密は接見役岩見守が小使を備入れようとしていることを聞いて、久里浜に行き、備ってもらおうとしましたが目的を果しませんでした。それでも軍艦を見て胸を躍らせて帰って来たりしています。当時、密は既に医学をすてておりました。時世というのでしょうか。それから、砲術、汽関学、航海運用学などを学ぶようになったのです。そのおかげでしょうか、全国至るところ、海に陸に歩きまわり、大都市で行かないところはなかったそうであります。

この間に得た知識が語学であり、身をもって体験したのが、通信交通の必要性であります。語学については、蘭学は既に学んでおりましたが、今後の大切な外国語は英語であることを知っておりました。たまたま、洋行のチャンスを掴もうとして、通訳官何礼之（かれいし）にしたがい、江戸に出ましたが、既に船が出ていて志を果さなかったのが、江戸から長崎に帰りました。この道すがら、何礼之に英語を熱心に教ったといえます。それから本格的に英語の勉強を初め、英語

教授として鹿児島開成学校に赴いています。36歳で英国に出張いたしました。そのもとはここにあったようであります。

西は鹿児島から東は函館まで歩きまわった体験から、通信交通の必要性を身をもって感じたことは、上に述べましたが、当時の通信はといえば、所謂飛脚屋便であります。飛脚屋便には仕立便、差込便、早便、並便の区別があって仕立便でも東京・大阪間が通例3日半、早便といっても7日、並便は半月かかるのです。これは官書を両京の間に送達する場合でありまして、中央政府と府藩県庁との間の文書は各府藩県庁と、その東京出張所との間で送達が行われます。藩と藩との間同志では東京で中継をするのです。賃金はどうかといいますと、仕立便で、東京・京都間が35両、差込便が3～8両、並便でも200～500文であったということであります。ですから、私文書や個人の手紙などは余程よい便をつかまえないとやれなかったし、貧乏人では思もよらぬことでした。これではいけないと前島は考えたようです。それでは、どうしたらよいか。西洋には便利な通信法があるという。その時はまだローランド・ヒルの方法は知らなかったといっています。ともかく、政府が責任を以って、義務としてやらなければならない。それには多額な金がかかるに違いない。一体どの位金がかかるだろうか、それに飛脚屋業といえば、賤しい商売と考えられていましたから、これを政府ともあろうものが果してやって行くことに同意するであろうか。また、代々の家業としてやって来た飛脚屋という商売を奪うと言うことになれば、その抵抗は激しいもののものであろう。どうして乗切ったらよいであろうか。こんな疑問がついで彼の頭から離れませんでした。

慶応4年(1868)7月17日、即ち今から丁度100年前に江戸は東京と改められ、9月に行幸がありました。前島は7月に駿河藩という新しい藩政府の役人になっています。そして、翌明治2(1869)年民部省に出仕いたしました。段々と責任を以って自ら考えなければならない地位に進んでいったのです。それどころではありません。この通信の仕事が彼の双肩にかかって来たのです。それは、1970(明治3)年5月10日、彼は駅逋権正(ごんのせい)に兼任を命ぜられたのであります。この時駅逋正は欠員でありましたから、前島が駅逋司の長官になったのです。駅逋司といえば官用旅行及び官用信書物品の送達を管掌するのですから、通信事業を企画して差支えないのです。

即ち全国普及の通信事業を創設することは彼の職掌中のこととなりまして、積年の希望を実地に施すことのできる機会に際会したのであります。その時の心持というものは、実に歓天喜地もただならぬ程であったと、彼は自伝の中で当時を追懐しております。と同時に、彼は一団の疑問

を以って満胸の苦悶を感じたと述懐しております。

彼の苦悩というのは、こういうことなのです。通信事業のために、政府に向かって多額の金を出せといっても無理だし、民間に向かって高い代金を払えといっても、これもまた無理である。従って、まず収支相償うような簡単なことから始め、それが旨く行ったら、段々と事業を拡大して行く、こんな方法しかないだろうと考えたのです。それにしても、一体どの位の金を準備したらよieldろうか。これが彼の疑問であったのです。ところが、一朝にして、この問題が解決したのです。前島が駅逋権正兼任（本官は租税権正でした）を命ぜられました第4日目、即ち明治3年5月13日、を彼は忘れもしないという風に記しておりますが、この新任4日目、廻ってきた文書に、東西両京の間の往復文書の運送費、すなわち飛脚屋へ支払う賃金の件がありました。これを見たときは覚え「我が事なれり」と叫んで喜んだということであります。よく調べて見たところ、毎月の平均は1500両であることを知りました。これ位なら、やっけて行ける、これによって郵便を創設しようという断固たる腹案を定めたといっています。

腹案というのは、月額1500両で、通信路線を東京から西京を経て大阪まで延ばし、毎日定時に、東京・大阪の両地から一便ずつを出発させる、そうして官民一般の通信物を送達するのです。そうなれば、三府並びにその沿道の人民は、皆その便利を得ることができるから、喜んで通信を託するであろう。そうして、大丈夫その送達賃で月1500両の収入はあがるだろう。そして久しからずして、新路線拡張の基金に充てることができるようになり、遂に全国に及ぼすこともむずかしくはないという腹案であります。

それから、35日後の明治3年6月17日、上野大蔵大丞が特例弁務使として、鉄道運賃の件について、英国に差遣されたのに従って、渡英することになったのであります。この前島の渡英によって、わが国の郵便はいよいよ創設の途を具体的に歩み始めたといつてよいのです。英国での彼の調査や研究は徹底したものであります。それは今のわれわれにとつても考えさせられるところが多いと思います。渡英の事情は大隈重信の追懐談でご紹介することに致しましょう。

扱て、郵便を始めてみると、切手の印刷や、郵便物輸送のための水陸の交通機関が必要になります。こうして、わが国に印刷局ができ、汽船会社ができ、運送会社ができたとす。みんな前

島の着想と努力のお陰です。如何に彼の識見と実行力が卓越していたかを知ることができるのであります。それを一々御紹介することは、時間が許しません。それを要約する意味において、私は皆さんに大隈重信と高田早苗の追懐談を御紹介しておきたいと思ひます。

前島の長女フジ子は高田早苗に嫁しましたから、前島は高田の義父に当ります。

1. 大隈重信 : 追懐録 (別紙 1)
2. 高田早苗 : 追懐録 (別紙 2)

前島密は 1911 (明治 44) 年 7 7 歳で隠退し、神奈川県三浦郡西浦村字蘆名に別邸を設けて、ここで暮らしました。1916 (大正 5) 年 7 月 1 日には逓信省構内に寿像が建設され、除幕式が行われました。その時の内閣総理大臣大隈重信の祝辞は次の通りであります。

前島男爵寿像除幕式場に於ける、当時内閣総理大臣大隈侯の演説(筆記) (別紙 3)

この翌年すなわち大正 6 年に夫人が逝去され、密も大正 8 (1919) 年 4 月 27 日第一次世界大戦の終わった翌年に、蘆名の別邸で長逝いたしました。享年 85 歳であります。

前島の死後、大正 11 年郷里の池部では有志相寄り、前島密生誕記念碑が建てられました。碑文は市島謙吉氏の撰でありまして、次の通り刻まれております。

前島密生誕記念碑碑文(別紙 4) なお、郷里では大正 15 年に前島記念池部郵便局が開設され、昭和 6 年には前島記念館が建設されました。

逓信省構内におかれていた前島密の寿像は、逓信博物館前に移されておりましたが、昭和 22 年故郷の前島記念館前に移されました。

現在郵政本省の玄関を入ったところに置かれている像は富安風生氏が恐らく逓信次官時代だろ

うと思いますが、前島家に保存されていた原型を修復して彫刻家に作らせたものだそうです。原型は明治 35 年、前島密が男爵時代に彫刻家長沼守敬（もりよし）によって制作されたものだそうです。

以上で前島密の業績と、郵便の初まりについて、御紹介を申し上げました。通信記念日のこの日に、先人の苦勞を偲び、奮起一番、われわれの手で、今日われわれが直面している難関を突破して、益々開け行く通信の発展を期したいものだと存じます。

長時間、御静聴をありがとうございました。これをもって、通信記念日の私の挨拶は終りに致します。





侯爵 大隈重信君談

明治二年に大蔵書記官であつた郷純造と云ふ人、今の郷誠之助君のお父さんであるが、此人が前島密君と渋沢栄一君、此両英傑を明治政府に抜擢することを建議した。夫れが採用されて両君共政府の役人となつた。私は前島君が先きであつたか渋沢君が先きであつたか能く覚えぬが、兎に角さう長い間を経ずして、別々に御目に掛つて、直に大蔵省の官吏に援擢をしたのである。其時分大蔵省に取調局と云ふ局を置いた。今の調査局のやうなものであるが、夫れへ這入つた。其時代には為すべき仕事が非常に多い。何しろ幕府の政治が王政に移り変わる時である。頗る複雑なる事務が錯綜して居る時である。それで此取調局と云ふのを置いて、其処で色々計画をし或は調べをした。夫れへ這入つたのであるが、前島君も渋沢君も大なる議論家で盛んに議論をする。全体私が前島君に御目に掛つたのは此時が始めではない、まだ王政復古の前、慶応二年に御目に掛つたことがある。夫れで明治二年に大蔵省へ這入られたが、此時に吾輩が大蔵省を支配して居つたのである。夫れからズツト友達になつた。今日から言へば丁度五十年になる。五十年の旧友だ。私より年は二つ三つ上であつたが、遂に私の方が跡へ生残つた。渋沢君は前島君より五つ六つ下で、之れは未だ盛んに活動して居られる。尤も前島君も強い身体の人であつたから、もっと生きる訳であつたが、先年腎臓病で生命も覚束なくて、医者も匙を投げたと云ふこともあつたが、何しろ精神が盛んであり、身体も強かつたために復活した。併し夫れから酷く弱られた。夫れから奥さんが亡くなられるとか色々な不幸があつた。どうも年を取ってからさう云う不幸があると、何だか助けを失うやうな心持がして非常に力を落すものであるが、前島君も夫れから俄に弱られたやうである。実に之は惜しむ可き訳である。併しながら君の一生は普通の人の子生三生にも当る。非常に活動をされて、実に大なる仕事をなし遂げた人である。王政復古以来の新文明の發達に力を尽し、大なる事業を後に残した。丁度明治3年に君は命を受けて英国へ出張された。其時は丁度日本で鐵道を造る為に英国へ國債を起した。其条件に付いて向ふの周旋人との間に衝突が起つた。さうして余儀なく裁判に訴へなければならぬと云ふ不幸が起つた。其訴訟事件に付いて此方からは後に全權公使などになられた外務省の上野景範と云ふ人が行つた。其人に附て前島君も行つたのである。前島君は向ふへ行つたら其の事件の傍らに郵便制度なり、或は紙幣の印刷の事なり、其他色々な事を研究して来いと云ふ漠然たる命令を受けて行つたが、兎に角重もなる仕事は鐵道公債に関する事である。始めて此時日本政府が外債と云ふものを募つたのだ。所が其条件に衝突が起つた。之は此方でも條約を十分に過ちのないやうにやる事が必要であるのだが、

其知識が乏しい為に衝突が起つた。吾輩も多少疎漏の責は免かれない。其処で余儀なく訴へることになつたが、此時は鉄道反対の声が全国に充ちて居り、政府の内部でも吾輩が鉄道を名として利己的の事をやるのではないかと云ふやうな攻撃が起つて居つた。そこへさう云ふ失策が出来たのだから愈々世論がやかましく、吾輩も大分苦んで居る時に出掛けて行つたと云ふ訳である。夫れから向ふへ行つて弁護士を雇つて、訴訟をやつて、幸にこちらが勝つたので事は治まつた。然るに其時分英国では郵便制度が一番優れて発達して居つた。彼の有名なる経済学者のフォーセットが考へたと云ふ郵便は遠近を問はず均一制度、之が一般に行はれて居つた。夫れを前島君が見て直に理解した。之れは尋常の人ではいかぬ。さう云ふ頭がないと出来ぬ。さう云ふことを見ると前島君は直に理解する、之れを日本に斯う云ふやうに応用すれば宜いと云ふことが分る。夫れから郵便局で貯金をやる。之れも英国でやつて居つた、未だ仏蘭西なり何処にも行はれて居ない。其他郵便制度に付ては余程得る所が多かつた。前島君の使命の本体は訴訟であつたが、夫れに附帯して郵便制度の研究をやつて、夫れを日本に応用して、今日の日本の郵便制度の基をなした。

此前島君の使命の本体たる外債に関する訴訟事件と云ふのは日本で鉄道を拵へるために金を借りた、夫れは鉄道公債と唱へる。支那に外交官で居つた所の英人のレーと云ふ人がある、之が日本に鉄道を拵へようと云ふ企てを有つて居る。英の全権公使のパークスの紹介で日本へ来て鉄道を造らう、金は幾らでも貸してやると言ふので、夫れに迂つかり金を借りる約束をした。所が其約束が法律上から云へば甚だ不十分である、そんなことをやると危険であると云ふことが段々発見されて、英国の東洋銀行の頭取などは厚意で色々勧告して、之れは早くどうかしなければ可かんと云ふので、そこで向うの銀行の雇付けの弁護士を雇つて訴を起して此方が勝つたのでおる。夫れで若し其事がなかつたら、さう急に前島君は英国に行く機会は無かつたかも知らぬ。尤も其時には大蔵省の中に郵便局はあつた。昔の飛脚屋で、日本橋辺に島屋とか何とか云ふ飛脚屋があつて、之れが町便と唱へて、通信は皆此処でやつて居つた。それを取上げ、而して郵便制度を布いて政府の専売で凡ての通信をなすことになつたが、どうも夫れをやつて居る間に完全なる方法を得ない。そこで前島君に向ふへ行つたら序に一つ調べて呉れろと云ふことであつた。詰り意外にも鉄道公債の訴訟が今日に残る日本郵便制度の基をを開くに至つた訳である。あの時に訴訟がないと前島君は行かなかつたらうし、行つても他の人が行つたので可かぬ。夫れ丈けの一種の天才的の前島君には独特の技倆があつた。夫れは非常に経済的思想が盛んである。フォーセットの原理を見ても直に理解する。夫れを日本に応用する。尤も日本の状態は英国と違ふから其儘持つて来る訳にはいかぬ。そこで応用をする。実際に之れを經營するに付て如何にすれば宜いかと云

ふこと、所謂物を経営管理するの能力は前島君は余程優れて居った。その意味は少し学問があれば直に理解する。所が理解して夫れを日本に如何に応用するかと云ふ学究的人は少ない。所謂学理を実際に応用する、此点に前島君は優れた能力を有って居る。而して偶然外債の始末、夫れに前島君が行つて其外債を無事に解決され、一方に此郵便制度を御土産に持って来て、今日の基を問くに至つたと云ふ訳である。

夫れから今日の印刷局の基、之が又前島君に関係がある。直接ではないが間接に関係がある。夫れは郵便制度を行はうとすると郵便切手が要る。所が英国ではオリエンタルバンクの手形を造るのに、どう云ふ訳か自国で印刷して居ない。独逸のフランクフルトのドンドルフと云ふ印刷会社にやらして居る。そこで前島君は英国から帰り掛けに此フランクフルトへ行つて段々調査の末、日本の太政官札の印刷を頼んで、向ふで彫刻して貰つた。夫れから郵便切手もやつて呉れと云ふので、其郵便切手も拵へて貰つた。夫れを日本へ持つて来た。夫れが日本の郵便切手の始まりで、其ドンドルフの会社で銅版で拵へて貰つた。太政官札は元と木板で造つて居つたのを矢張り銅版でやるやうになり、夫れが今日の紙幣の基になつた。夫れから日本に段々銀行が出来、公債を発行し、郵便切手も盛んに印刷する、又紙幣も印刷すると云ふやうになつたから、之はどうしても印刷局を造る必要がある。夫れにはどうするかと云ふと、幸にドンドルフ会社に関係があるから向ふへさう言つてやらうと云ふので、ドンドルフ会社へさう言つてやると、向ふから直に印刷機械を送つて来た。技師に有名なキオゾネと云ふ人、之れは伊大入で其方の彫刻には優れた人である、写真術にも達して居る。此人がドンドルフ会社に雇れて居だのを日本へ招聘して、印刷局で紙幣なり公債なり郵便切手なり盛んに造ることになつた。夫れだから前島君が其印刷局を拵へた訳ではないが、前島君がドンドルフ会社と関係を付けて紙幣ど郵便切手を造つたと云ふことが、向ふから機械も買ひ技師も雇ふと云ふ原因になつたので、矢張り印刷局の基も前島君が与かつて少からぬ関係があると云ふ訳である。

之れが先づ吾輩の前島君を知る始めで、且つ前島は中々の議論家で、又書くことも達者であつたが、併しながら実務は更に夫れ以上の人であつた。実際に當つて物を経営するに非常な才がある。此点には吾輩は深く敬服した。又一般からも此点は認められた。渋沢君とは非常に仲宜しで、前島君も渋沢君を非常に尊敬し、又渋沢君も前島君を尊敬し、互に相敬して居つたが、渋沢君は其内政府を退いだが、前島君はズット残つて大久保利通の下に内務に居つた。而して通信事業の為に力を尽したが、特に君が骨を折つたのは船の事業である。之れは君は非常に苦んだが遂に大成功をした。船の事業は元と大蔵省の管轄である。今此船の事業のことを云ふ前に鉄道のこと

を簡単に話す必要がある。日本で鉄道を造るに付いて凡そどの位金が掛るだらうかど云ふ話が起つた時、誰にも夫れが分らない。誰も此鉄道に関する知識は皆無である。そこで吾輩は前島君に君一つ見積つて見て呉れと言ふと、前島君は宜しい、やつて見ませうと言つたが、之れも実は知識はない。併しながら色々研究して書出されたものを見ると二千万円と云ふのだ、其時の二千万だから今日の五千万位に当らう、之を鉄道憶測と名付けた。然るに之れを外国人などに見せた所が、決してさう杜撰なものではない、中々よく出来て居る。何にも知らぬ素人が拵へたものだ、土地の調査をしたこともない、膝栗毛で東海道を歩いた丈けだ。夫れが是れ丈けのものを遣るのは偉いと言って外国人も敬服した。さう云ふ訳で前島君は一種の優れた才があつた。此鉄道を造るに付ては吾輩は大いに主張した。吾輩は大蔵省の長官で、次官が伊藤博文、其下に最も働いたのが前島君だ。余程此時には議論が酷かつた。渋沢君も中々若いに不似合な時々考へる流儀である。どうだらう、さう鉄道は尚早しと云ふ風であつた。井上侯（馨）なども少し早いだらうと言ふ。熱心にやらうと云ふのは吾輩と伊藤と前島丈けであつた。さう云ふ訳で前島君の才は段々認められて来た。其内に欧羅巴へ行って帰つて来て、郵便制度を始めた。今迄のやうに飛脚と唱へて棒の先に郵便物を附けて昼夜兼行駈けて行く、逆もそんなことでは駄目だ。そこで成る丈け船の行く所は船でやらう、夫れから成る可く車でやらう、併ながら道が悪くて逆も車の行かぬ所が多い。日本は奥の長い国だから、汽船でやると割合が宜い。そこで藩々で持つて居った船を取上げて、元の間屋とかさう云ふ金持を集めて汽船会社を拵へた。之れを郵便汽船会社と称し郵便局が之を保護して、さうして船で郵便物を配達するのが根本で、傍ら乗客も乗せ荷物も運んだ。郵便は成る可く早く地方から来るのを纏めて中央へ送る。今日は日本の航海業は実に盛んになつたが、其本は微々たる破れ船で郵便物を送ると云ふ事から起つた。各藩で皆二艘か三艘持つて居つた。吾輩の藩では五六艘持つて居つたけれども千噸以上の船はない。三百噸とか四百噸とか云ふ船で、而かも破れ船だ。夫れを皆取上げて東京大阪の船問屋とか其他縁故のある者を勧誘して御用会社を拵へたと云ふ訳である。

夫れでやつて居つたが、どうも十分でない、何しろもとの飛脚屋と云ふものを潰してしまつた、それで飛脚屋共が暴れ出した。前島と云ふ奴は悪者である。オレ達の先祖からの商売を奪つた、怪しからぬ奴であると云ふので、此時は前島君は非常な攻撃の衝に當つた。老年に至つた前島君を見る人は、前島君は如何にもおとなしい人だ、決して強い人ではないと思うであらうが、どうして若いとぎば中々強情、利かぬ気の人であつた。さう云ふ攻撃が来れば愈々勇気を出して夫れに當る。大抵の人はさう云ふ場合には臆病になるものだが、君は仲々さうでない、強固なる意志

で何処迄も貫かんければ止まぬ。さう云ふ難儀を経て今日の郵便制度の基を開き、さうして船と結び附けた。之れは後に二つに分れて郵便制度は別に郵便局で發達し、船は三菱とか共同運輸会社とか続いて郵船会社、商船会社更に東洋汽船となり、夫れから社外船も出来、今日では一万噸以上の船も沢山出来て非常な盛運を来すに至つたが、元はどうであるかと云ふと、さう云ふ歴史を以て日本の航海業は現出して来たのである。即ち郵便が元で船が發達した。又郵便切手が元で印刷局が出来た。其当時は仏蘭西にも亜米利加にも行はれて居ない郵便貯金、之れが日本に応用された。今では六億の貯金かおる、今に十億二十億にもなるだらう。谷から少しづつ流れて来る水も後には大河をなす。日本の郵便も電信も夫れから船も印刷業も、其元の一滴は何処から来たかと云ふと、前島君の力から起つた、実に其功は没す可らざるものである。私が君を歴史上の人であると言ふのは此所にある。

丁度内務省が新たに出来た時であつたが、其時の内務卿は有名な大久保であつた。どうも自分ば地方行政の複雑した事には経験がなくして心許ないから、お前の部下に前島と云ふ中々立派な人物が居る。あれを一つどうかして呉れんかと云ふ吾輩へ話があつた。宜しいと、直に前島君に話をして内務省へ行つて貰つた。大久保は大に喜んで直に之れを今日で云へば次官に抜擢して總ての事を前島に委任してしまつた。さうして内務の事業をやらして見ると、自己が考へたよりは能くやつて呉れるから、大久保は非常任信用して、度々吾誓にも礼を言つた。さう云ふ風で大久保の信頼を受けて、丁度大久保の最後まで居つた。丁度其時に三菱に航海業をやらせることになつたが、之れは世間から非常な反対があつた。夫れにも拘はらず大久保は何としても之れは三菱にやらせなければならぬと云ふので意を決した。大久保ど云ふ人は非常に意志の固い人で、外から誤魔化されて考へが動くやうな詰らぬ先生ではない。併しながら此時は非常に世間の反対があつたので、若し前島の意向が動くとやり悪い、所が中々動かぬ、夫れで愈々前島君を信用した。夫れは前にも言つた通り各藩の破れ船を取上げ、東京大阪の間屋のやうな人々が株主となって郵便汽船会社を存へてやつたが、之れが少しも役に立たぬ、刊己内の事ばかりやつて少しも用をなさぬ。そこで之れは一つ三菱を使って見ようと云ふので、やらして見ると役に立つ、夫れで比破れ船を皆三菱に支配させようと云ふので、三菱にやらせることになつた。夫れだから其会社の者は喜ばぬ訳だらう。盛んに三菱の攻撃が起つた。夫れは過去つた跡から見ると何でもないやうであるが、其時は非常に面倒な事であつた。其局に前島君が當つた。君は頗る廉潔な人である、自己の利害などは毫も眼中にない。全く国家の目的から完全に郵便制度を發達させよう、日本は島国である、何としても航海業を盛んにしなければいかぬと云ふので、大いに努めたものである。

尤も君は少し航海業を稽古したことがある。故に船と云ふ感じは普通人以上に強い。さう云ふ訳で今日の日本の航海業の起りも矢張り基は前島君が与つて力があるのである。

前島君は年を取つてから愈々円満になられて、世間の人は前島君を昔からあの通り円満な人であると思つた。無論比較的円満であつたけれども、自己の意志を枉げても人の言ふことを聞くと云ふやうな人ではない。時々衝突も起る、一部には前島君を喜ばぬ人も随分あつた。例へば大蔵省の内部にもあつた。併しながら伊藤などは、前島君の技倆を知つて居つた。始めは大久保なども余り前島君を喜ばぬのであつた、何故かと云ふと老西郷、勝安房、あゝ云ふ方から渋沢や前島は宜くないと云ふ話が這入つて居る。そこで大久保などは始は食はず嫌ひであつた。併し乍ら前島君は権力のある人に取り入つて、自己の地位を得ようと云ふ如き卑劣な人ではない。実に人格の高い、何処迄も国家の為に忠実に御奉公をすると云ふ人であつた。時々衝突しても、本当に眼識のある人達は、前島君を多少疑つた人も其疑ひを解く。大久保なども其一人で、殊に仕事をやらせると益々前島君の技倆を認めて信用を増して来ると云ふ訳である。そこで前島君の地位を得たのは唯才幹と云ふばかりではない、また種々の事務が出来る事業家と云ふばかりではない。矢張り政治的技倆、夫れに伴ふ誠実なる人格を有つて居つた。之れが為に久しきを経て益々信用を増してきた。一時の才幹に走つてやるのはどうかすると長持がしない。前島君の事業、前島君の信用は、君が其局を去つてズット継続して久しきを経て愈々君の徳が現はれる、之れが即ち前島君の人に優れた人格である。

吾輩が政府を去る時に、前島君には跡へ残つた方が宜かろうと言つたのだが、矢張り政府を去つて、夫れから学校などに大分力を尽された。又民間で政治上にも相当の力を尽された。併し始めやつた航海業が起原となつて後に郵船会社とか東洋汽船とか立派なものが起つたが、夫れには非常に力を入れられた。

前島君は小さい仕事にも色々関係されたやうであるが、夫れは吾輩多く知らぬ。又吾輩が語らぬでも之れは近頃の事で、皆分つて居る事が多い。兎も角前島君は維新前後は苦しい境遇で随分難儀もされた。苦勞もされた。其間に共に苦勞をした妻君、所謂糟糠の妻、之が又立派な婦人であつた。前島君の家庭は頗る円満な家庭で、其奥さんが非常に前島君を内で助け、又子女を教育された。吾輩は高田君の妻君、之が始終懇意で家へもやつて来るが、さう云ふ訳で或る度合迄は前島君の家庭を知つて居る。如何にも平和な円満な家庭である。さうして余程趣味が多くて風流であつた。之れが吾輩が常に前島君を重んじて敬服して居る所以である。即ち私の言ふ人格を以て始終して死に至るまで之を失はずに来たのである。

今度前島家嗣子の墾望と其親族の希望とに依つて、市島謙吉君が専ら編纂を主宰せられ、前島翁の自伝竝に逸事等が纏められるのは、親族関係の自分から云つても此上の喜びはないのである。元来前島翁は天保六年と云ふ年に生まれ、大正の今日に至るまで生存してゐた人であるから、時勢の上から云つても、又其境遇の上から見ても、伝ふべき事績が少なからずある事は、自分が平生から考へて居つたのであるが、元来極めて謙遜の性質であるから、自己の功業等に就いて、余り語る事を好まれなかつた。故に此儘打捨てゝ置くならば、其百歳の後に於て、子孫たる者が、其家祖の事業に就いて、全く無知識になるのみならず、其事業の中には多少世間に伝ふべきものがあるにも拘らず、遂に長く煙滅する事になるのは必然であると考え、屢々故翁に対して其過去の事蹟を大休でも宜しいから書きとめて貰ひたいと話したのである。併しながら兎角持前の性質が累ひをなして、容易に快諾をしてくれなかつたが、子孫に其家祖の事蹟を多少たりとも知らする必要があると云ふ点から屈せずして強要した結果、蘆名の別業に退隠した後、やつと筆を執る事になつたけれども例の謹直な性質が此場合にも累ひをなして、其事蹟を口授するなぞと云ふ事は到底しないのみならず、自分で筆を執つても屢々稿を改め、其度毎に記録が簡単になつて、案外乾燥無味なものが出来だのみならず、それも結末に至らずして筆を易へる事となつたのである、斯ういみ次第であるから、「鴻爪雪泥」と題した自伝の一部も案外面白くないものとなつたが、併し老人が折角書き残したものであるし、且、大隈侯、渋沢男の如き故翁の先輩又は友人が今尚矍鑠として居らるゝから、北方々や其他僅に生き残つてゐる故翁の知人及び後進の人々に逸話事蹟等のお話しを願つて、之を取編めたならば、何か出来ない事もなからうと云ふ所から、遂に此計画が成立した訳である。

自分は故前島男爵とは姻戚の間柄であるから、故人の事に就いて話をするのは何となくしにくい様な感じがあるのみならず、生来自分は記憶の悪い性であるから、人の逸事遺聞なぞば直ぐ忘れてしまふのであつて、従つて此場合故翁に就てお話を材料は頗る乏しいのである。併しながら故人の先輩友人其他知己の方々が、だんだん故人に就いて或は逸事を談じ、或は感想をお話し下さるのに自分だけ沈黙を守つてゐては、横着者と誤解さるる虞がないでもなく、且甚だ心苦しい訳であるから、極簡単に故人に就ての感想を述べて、御免を蒙る事にしたい。

自分の見る所を以てすれば、前島密なる人の一生を通じて自分の敬服する点は、其識見の優れてゐると云ふことにあつた。故翁は越後の高田在の農家に生れて、少年時代には頗る苦学した事

は其自伝にも審であるが、其識見の時流に超えてゐた事は其青年時代に於て、全国の海岸視察を企てたと云ふ事に依りても證せられたのである。此一事は菅に識見の優れてゐる事を誰明する許りでなく、交通不便の當時に於て、殆ど全国に亘つて無錢旅行に近き事をしたのであるから、故翁の性格の一部である艱難辛苦に堪へると云ふ事、換言すれば其意志が頗る強烈であつたと云ふ事も亦證拠立てらるゝわけである。而して其後故翁が学んだ事は何であるかと云ふと、蘭学より一転して英語を学び、初め海軍の事を研究して、更に進んで商船の事にまで及んだのである。而も遙々函館に赴いて、当時の識者たる武田氏に就き、之を学んだと云ふに至つては、今日より見れば何でもない事のやうであるが、安政年間にかゝる事に着目し、これを研究したと云ふ事は先づ以て異常な事と謂ふべきである。又、其後慶応年間に於て翁の学問及び識見が稍人の認むる所となり、今日の帝国大学の前身たる開成所の数学教授に任ぜられたるに拘はらず、其職を擲つて頗る下級の地位であつた兵庫奉行の手附となり、神戸に赴任して新に開けたる関港場に於て税関に従事し、税関倉庫の事を研究したと云ふ一事も、翁の識見が平凡でない事を示すに足ると思ふ。斯くの如く修養を積んだ人であるから、後に召されて中央政府の官吏となりて、或は関税の事、紙幣の事、度量衡の事、鉄道の事、商船の事、即ち旧日本を改造して新日本と為すに就て最も必要の事に関係し、夫々適當なる意見を立て、自ら其事に当り、殊に鉄道の事の如きは当時の日本人が見た事も聞いた事も殆どないと云ふ時代であつたにも拘らず、大隈、伊藤岡政治家が京浜間に鉄道を敷設せんとする計画を立つるに當つて、鉄道臆測なるものを立案し、曲りなりにも之が予算を立ててこゝろ政治家を驚かしたと云ふのも、決して偶撚でないと思はるるのである。而して斯かる脳髓の所有者であるから、かの郵便と云ふ大事業を創始し、日本のローランドヒルと謳はれたのも決して故なきにあらずである。故翁は菅に郵便の事を創始したのみならず、之に附帯して内国通運の途を講じ、郵船会社を起し、海員掖済会を創始し、郵便報知新聞を發刊せしむる等、その経営は頗る行届いたものである。又故翁が識見に富んでゐたと云ふ証拠は、人に先んじて東京遷都の建議をなし、世間未だ何等の議論を聞かざる時に當て、文字の改良、ローマ字採用を唱へ、盲啞教育の必要を感じて、東京盲啞学校の創設に尽力した等の事績に就いて見ても明かであると思はれる。要するに故翁は識見に富んだ人であつたが、他面又、事務家としては殆ど理想的人であつた様に思はれる。併し事務家であつた事が却つて累ひをなし、世間では単に事務家の上乘なるものであるかの如くに故翁を誤解してゐたものも少なからずあつた様であるが、其事蹟に徴して見ても、単に事務にのみ没頭して満足する人でなかつたと云ふ事は必ずしも不適當なる批評ではあるまいと思ふ。故翁が晩年京釜欽道の創設に尽力し、早く此鉄道敷設の権を我が国が



握らざる時は、臍を嚙むの時が到来すると、熱心に主張し、他の諸君と共に日夜奔走し、遂に其目的を達したために、日露戦役当時に於て、多大の効果が現はれ、因らずも国家に対して少なからぬ貢献を致したといふ一事も、又以て故翁の識見の平凡でない事を証明する事が出来ようと思ふのである。

故翁は斯くの如き性格の人であつたから、開国主義を以て終始して所謂攘夷家なるものとは到底反りが合はないのは無理もない次第である。故に幕末の当時に於て、薩長其他の攘夷論者とは到底同じ道を歩む事が出来なかつたのみならず、さればと云つて極端なる佐幕党とも素より意見を異にしてゐたのである。故に翁が鹿児島藩に聘せられて教鞭を執つてゐたのに、遂に之を辞するに至つたのは攘夷論者と反りが合はなかつた為であり、又江戸に帰つて後も屢々佐幕党の為に危害を加へられんとしたのも極端なる佐幕論者と意見を異にした為めであると思はれる。故翁の自叙伝中にもあるが、故翁は当時頗る外国の干渉を憂へてゐた。数翁の眼にはナポレオン三世の、幕府の背後に立つて干渉の端緒を得、遂に日本を併呑せんとする隠謀が映じたがために、頻りに余地論を唱へて、遂に山岡鉄太郎氏より余地堂の筒額を贈られたと云ふのも、一面翁の識見の平凡でない事を示すと同時に、他面翁が到底極端論者となり得ない性格である事を証明するものである。要するに故翁は終始建設的人物であつたど同時に又建設的事業に頗る興味を持たれた人であつた。破壊と云ふ事には翁は趣味を持たざるのみならず、到底為す事が出来なかつた故に、幕末の破壊時代には毫も志を得なかつたのであつて、徳川幕府亡び、静岡藩起るに及んで、これに附帯する建設事業に関係して其立身の端緒が啓かるゝに至つたのである。更に明治政府に召されて之が創業の建設事業に関係するに至つて大に得意の時代が來つた次第である。

故翁は明治十四年の政變に際して、大隈侯と共に職を辞したが、これは畢竟薩長藩閥者流が翁を誤解して、大隈一味の徒党と認めた為めと伝聞してゐる。故翁が中央政府に仕へるに至つたのは、大隈参議の投擲に依る事は勿論であるが、併しながら翁は其朝にある間に、大隈参議と濃厚なる私的關係があつたやうでないのである。翁は其初めに當つて大隈、伊藤両参議の改革の補佐者であつて、等しく此両政治家に推服すると同時に、両政治家も頗る翁を珍重された様である。後に至つては大久保内務卿の唯一の補佐者であつて、大隈参議にも伊藤参議にも偏倚した地位に立つて居らなかつた様である。併し其誤解であると否とに拘らず、翁は大隈参議と共に辞職し、而して大隈侯に対して満腔の同情を捧げて尽瘁したのであつた。翁は其年を終るまで大隈侯に対して深き深き同情を以て居たのみならず、之に対して甚大の敬意を払つて居たのであつた。けれども故翁は決して在野の政治家として立つべき性質の人ではなかつた。翁は大隈侯と共に立憲改

進党を組織して、其創立に際し頗る力を致したのであるが、併し政党なるものが結局翁の性格に適せず、又翁の趣味に合つたものでないと、自分は思ふのである。翁は要するに政治家と云ふよりも、寧ろ経営家であつた。前に述べたやうに単純なる事務家でないのは勿論であるが、又翁の性格上鬼面嚇人的のどころは絶対に欠いて居たのであるから、世間の所謂政治家とは其性格を異にしてゐたと謂はなければならぬ。

故翁に於て最も自分の敬服するところは其識見の優れてゐる事と自己の計画を遂行するに於て綿密なる注意及び事務の才幹を以てして、結局之を完成せずんば止まずと云ふ徹底心とにあつたのであるが、同時に翁は又無類の正直者であつた。其長い生涯に於て、公に於ても、私に於ても、正直の二字を離れた事はないと自分は深く信ずるのである。翁は自ら自らを造つた人であるから、従つて頗る節儉家であつたが、併し吝嗇家ではなかつた。又翁は頗る深切であつた。友人、知己の依頼に応じた場合などは、頼んだ本人よりも熱心になつた事は珍らしくなかつたのである。

大正 5(1916)年 7月 1日 寿像とは生存中の人の像をいう

80歳まで天杯をうけたのを祝う意味で作られた

左の一編は前島男爵寿像序幕式場に於て、当時内閣総理大臣たりし大隈重信演説筆記なり。追懐談と聊か重複する所もあれど爰に記載す。

本日は私の旧友たる前島男爵の為に、有志諸君が寿像を建設されその除幕式に臨んで簡単な祝辞を述べたいと存じますのであります。男爵は私の先輩年齢は何でも三つ計り上だ、併し官吏としては私が先輩、男爵と渋沢男爵は大方月も同一であつたらう。大蔵省へ奉職されたのが明治二年、当時前島男爵渋沢男爵此御両公は英気勃勃たる進歩的の御方であつた。其当時大蔵省に於て総て文明的事業を起すが為めに、取調局と云ふものを置たのである。其当時に盛んなる論客も夥しくあつたが、此前島男爵渋沢男爵の前に立つ人はない位な盛んな御方であつた。即ち先見家であつた。私は男爵が斯かる先見家であつたから、文運発達の上に通信事業の必要なことを認められたのであると思ふ。男爵の通信事業に於ける功績は、既に發起人或は唯今通信大臣の祝辞に述べられたのであるが、私は其以外に申し上げたいと思ふのは全体通信と運輸と云ふことは離るべからざるものである。通信其物は運輸に依つて発達すべきものである。随つて交通通信並行して起つたのである。男爵の功績は無論通信にあるが、併ながら男爵が交通の上に於て立てられた功績は又郵便事業に譲らぬ大なるものがある。今日は内地及び大連に船籍を有つて居るもの殆んど二百万噸に垂んとして居る。此海運事業に就ては、男爵は其通信事業を進めるに就て必要な交通のことを考へられて、明治四年に郵便汽船会社と云ふものを拵へられた。其当時は千噸の船がなかつたのである。速力は十ノツト以下であつた。而して極めて低い古い封建の大名が持つて居つた所のもので、廢藩後政府に集まつたものを全部合しても二三万噸に過ぎぬのであつた。併ながら郵便事業を開くに就ては、其郵便物を何に依つて運送するか、何としても船が必要である、是に於て其船を集合して郵便汽船会社が成立つたのである。夫れは現在の日本郵船会社も大阪商船会社も東洋汽船会社も其他の汽船会社も、即ち此今日の二百万噸と云ふものは皆之から導かれたのである。此通信と交通の発達は、今日の日本の富を大いに抄取らしつゝある。総ての文明も之に依つて其発達の度を増すのである。嘗て飛脚屋に依つて運送されたものが、汽船に依つて運送されることになつた。所が陸上は甚だ不便である。是に於て鉄道だ、取調局に於て前島男爵渋沢男爵が殊に盛んに討論研究して、一方に反対あるに拘らず、此鉄道を拵へることになつた

のが明治三年から四年の間である。斯くして郵便電信汽船鉄道此れ皆相聯関して發達したのである。概括して言へば、國の文運の土台をなす所の交通運輸、之が今日國の富を増し政治上に於ても軍事上に於ても商業上に於ても教育上に於ても、國の文運を撈取らしたことは是程大なるものはない。而も此郵便電信電話、今年の予算に現れた所の此取入は六千何百万円、多分七千万円に達すると云ふ有様である、実に盛んなりと謂ふべし。此の如きものが取調局に於て英氣勃勃たる、竝に外國文明に触れて其勇氣の盛んなる、渋沢君前飢君又吾筆も之に加はり、盛んに討論されて之が現出したと云ふ訳である。勿論一方には非常な反對があつた、飛脚屋東海道の宿屋其他の者は皆之に反對して前島君を暗殺せんとする騒ぎも起つたのである。鉄道其物に就ては吾輩は國を賣る國賊である、吾輩を殺せと云ふ騒ぎも起つたのである。其時代のことを考へて見ると実に今昔の感に堪へぬ。此社會の變化の大なる時に文明的事業に力を尽されて、今日八十餘歳の高齡を保たれ、尚ほ健全にて居られる前島君の爲めに此寿像が建てられ、其前に前島君御夫妻を見ることを実に私は喜ぶのである。殊に其當時共々に力を尽された所の渋沢男爵が之に加はられたことを以て一層感を深くする訳であります。私は殆ど五十年に近い親友である。その間には言ひ尽さんとしても尽されぬ程述べることは沢山あるが、今日は極く簡単に文明進歩の上に大なる功績を貽されたる前島男爵に対して、多数の諸君が此寿像を建てられたことを深く感謝致し、竝に簡単に祝辭を述ぶるに止めます。 .

#### 別紙 4

##### 前島密生誕記念碑

(市島謙吉 撰)

り、ウラにはシェクスピアで名高い坪内逍遙の文で次のやうに書かれてあった。ひらかなまじりの書き下し文で、それは誰にも読めた。さすがに漢字をやめよとなへた人の記念の石ぶみらしかつた。

「日本文明の一大恩人がこゝでうまれた。この人が維新前後の国務に功績の多かつたほかに明治の交運に寄与して永く後生に傳ふべきものは郵便その他の通信事業である。これまでは緩慢な飛脚便によつた手紙が迅速に頻繁に集配せらるゝやうになり、小包郵便、郵便為替、郵便貯金の制度の出来たのもみなこの人の賜である。海運業や新聞界の先駆者であり、電信電話、鉄道の開通の殊勲者でもあり、ことに、日露戦役より先に敷設された朝鮮の鉄道の計画者であつた。また、早稲田大学盲啞学校の教育事業や保険、海員救済など社会事業に関する顕著な貢献や率先して東京遷都を主張したり、維新前から漢字の廃止を唱えたほどの非凡な先見はいつまでも忘れることは出来ない。忠実で果敢で廉潔で趣味はなかつた。大正8年4月歿。年八十五」